

表3-3 燻試料に残存する脂肪の脂肪酸組成から算出した動物脂肪の分布割合

脂肪酸	No.29	1	2	3	4	5	6	7	8	計算値
C16:0	74.5	45.9	48.8	34.7	34.3	44.3	44.4	43.4	38.3	74.120
C16:1	-	22.8	-	4.9	3.7	7.0	6.2	3.9	4.8	0.172
C18:0	19.2	6.4	13.7	14.0	14.2	24.6	11.5	11.5	9.9	19.058
C18:1	3.0	14.0	6.6	12.7	19.1	13.5	24.5	32.1	35.8	2.970
C18:2	-	4.2	10.0	13.5	13.8	4.5	10.6	2.3	11.2	0.000
C18:3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C20:0	3.4	1.1	1.3	6.3	5.0	2.4	1.4	1.9	-	4.192
C20:1	-	2.1	-	0.3	0.4	0.3	0.1	1.3	-	0.871
C20:2	-	-	-	-	-	0.3	0.1	0.2	-	0.584
C20:4	-	-	-	6.5	4.1	-	-	-	-	0.636
C20:5	-	-	-	1.3	1.1	-	-	-	-	0.985
C22:0	-	0.4	3.8	-	-	0.9	0.4	0.6	-	1.384
C22:1	-	1.3	3.2	0.0	0.1	0.3	0.1	0.4	-	1.204
C22:2	-	0.4	-	-	0.1	0.4	0.3	0.3	-	1.054
C22:5	-	-	-	5.4	3.9	-	-	-	-	1.632
C24:0	-	1.0	7.5	0.4	0.3	1.2	0.3	0.7	-	0.120
C24:1	-	0.3	5.3	-	0.2	0.3	0.2	1.5	-	0.644
分布割合 (%)		5.5	1.2	16.3	25.2	1.5	29.6	5.5	15.3	

*対象名: 1 ヒトの手の油 (加熱) 5 ニホンジカ (加熱)
 2 イノシシ血液+肉 (加熱) 6 キジ (加熱)
 3 アカハラ (加熱) 7 マガモ (加熱)
 4 モズ (加熱) 8 イヌ (加熱)

表4 燻試料に残存する脂肪の分布割合 (%)

試料No.	ヒトの手の油	イノシシ	アカハラ	モズ	ニホンジカ	キジ	マガモ	イヌ
7	0.8	3.3	18.9	27.2	1.7	23.2	10.7	14.1
11	4.2	6.2	21.0	34.5	2.1	14.7	8.2	9.2
29	5.5	1.2	16.3	25.2	1.5	29.6	5.5	15.3



図 1 - 1 SI 1 集石内礫の配置図

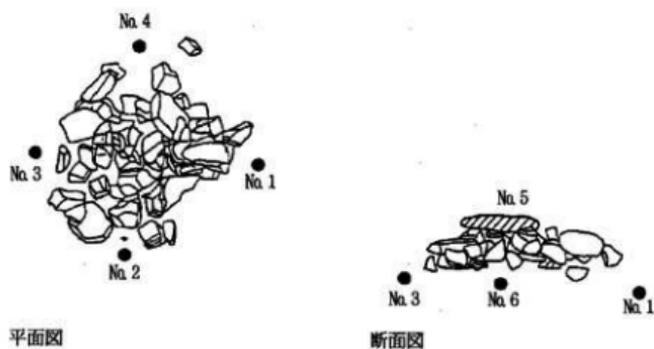


図 1 - 2 SI 2 集石内礫の配置図および土壌試料採取地点図

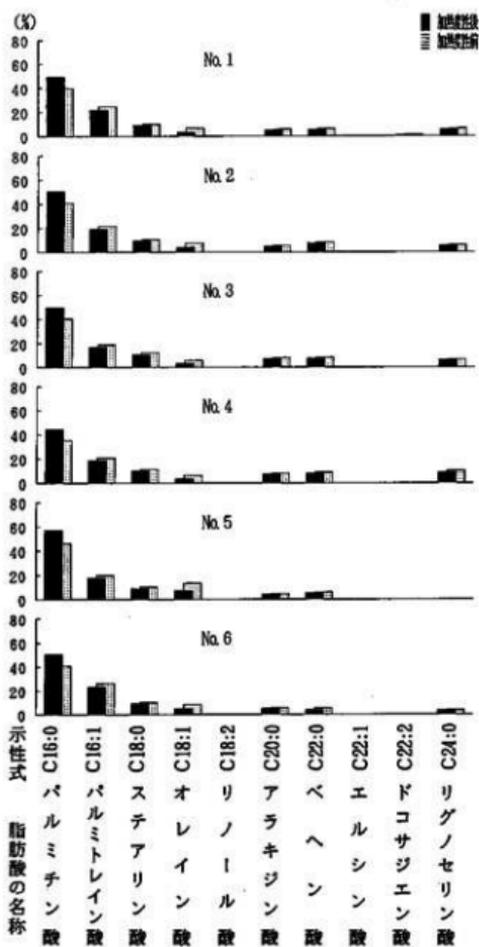


図2-1 SI 2 周辺土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成

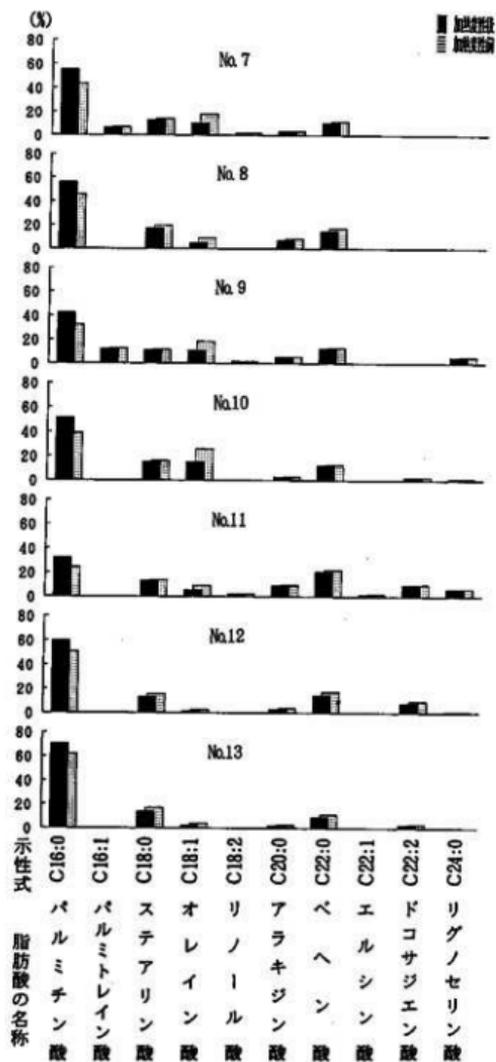


図2-2 SI 2 集石内塵に残存する脂肪の脂肪酸組成

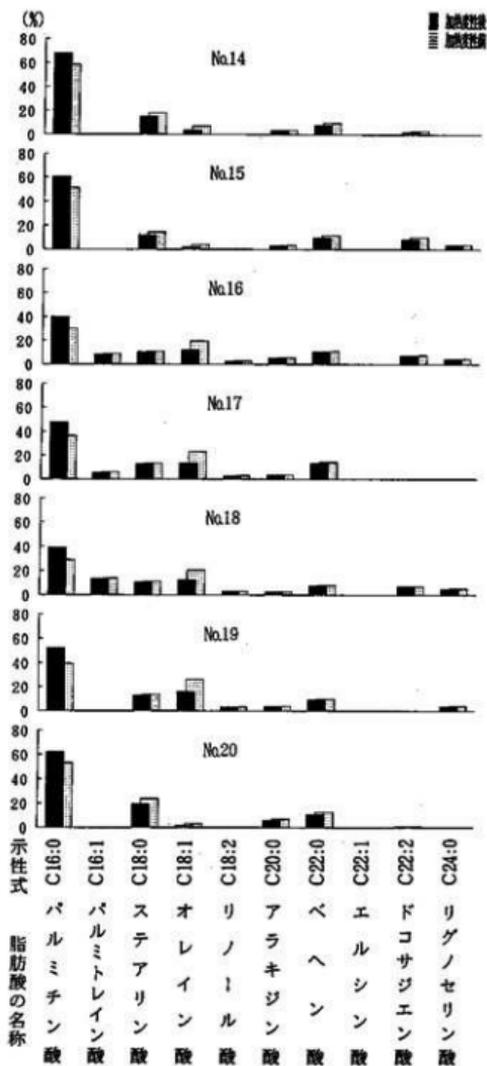


図2-3 S12集石内燻に残存する脂肪の脂肪酸組成

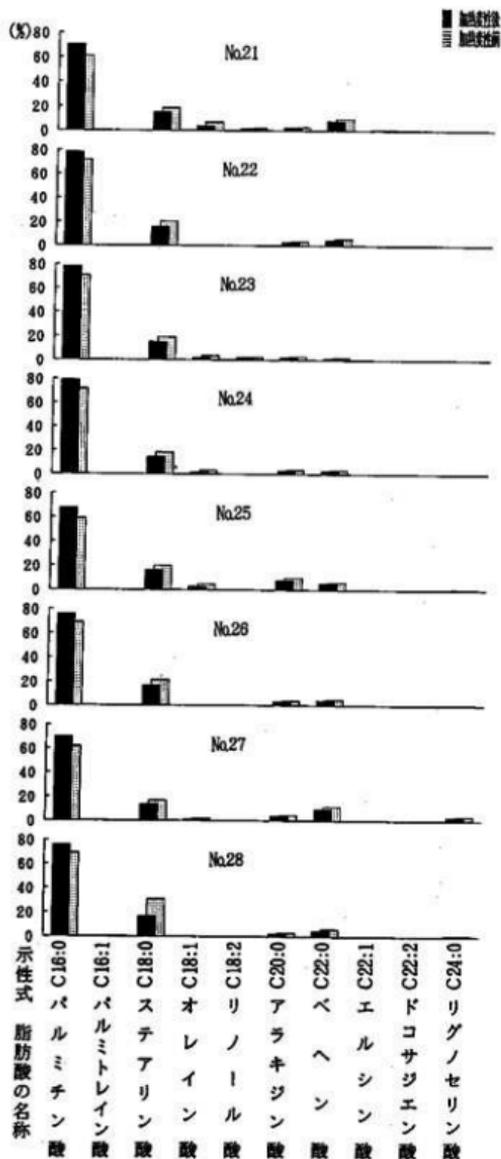


図2-4 SI 2 集石内臓に残存する脂肪の脂肪酸組成

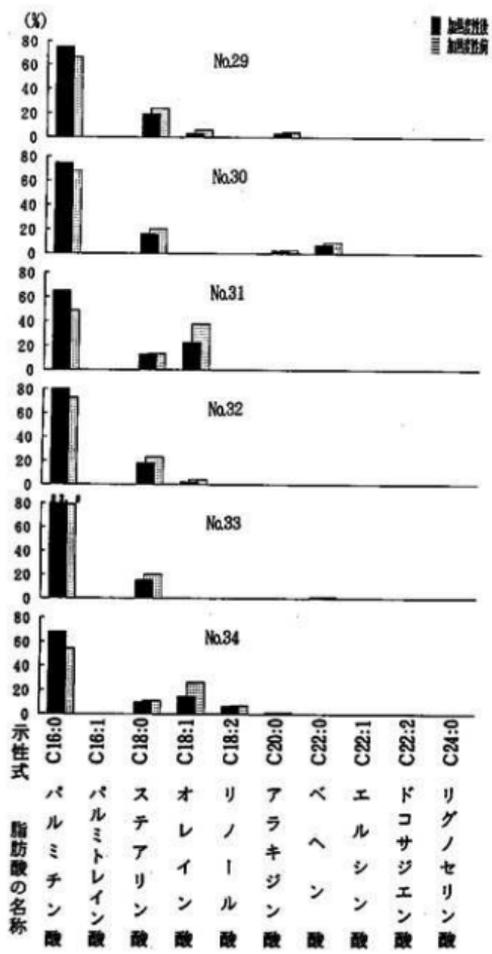


図2-5 S11集石内蔵に残存する脂肪の脂肪酸組成

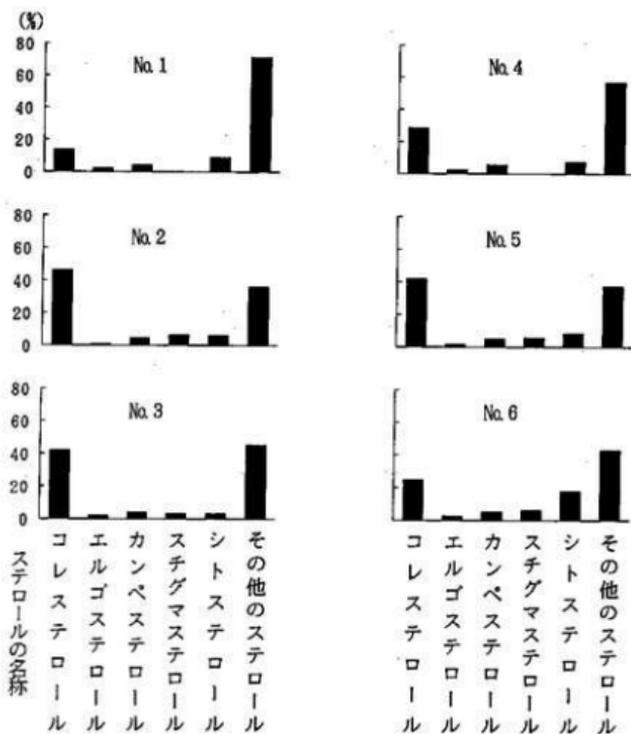


図3-1 SI 2 周辺土壌に残存する脂肪のステロール組成

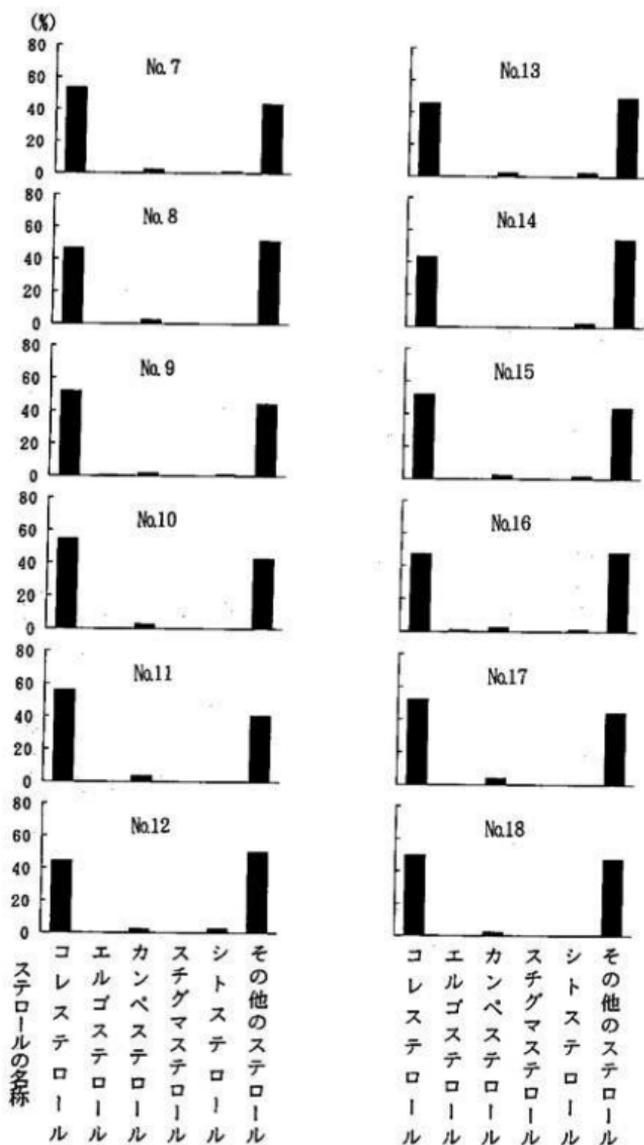


図3-2 SI 2 集石内燼に残存する脂肪のステロール組成

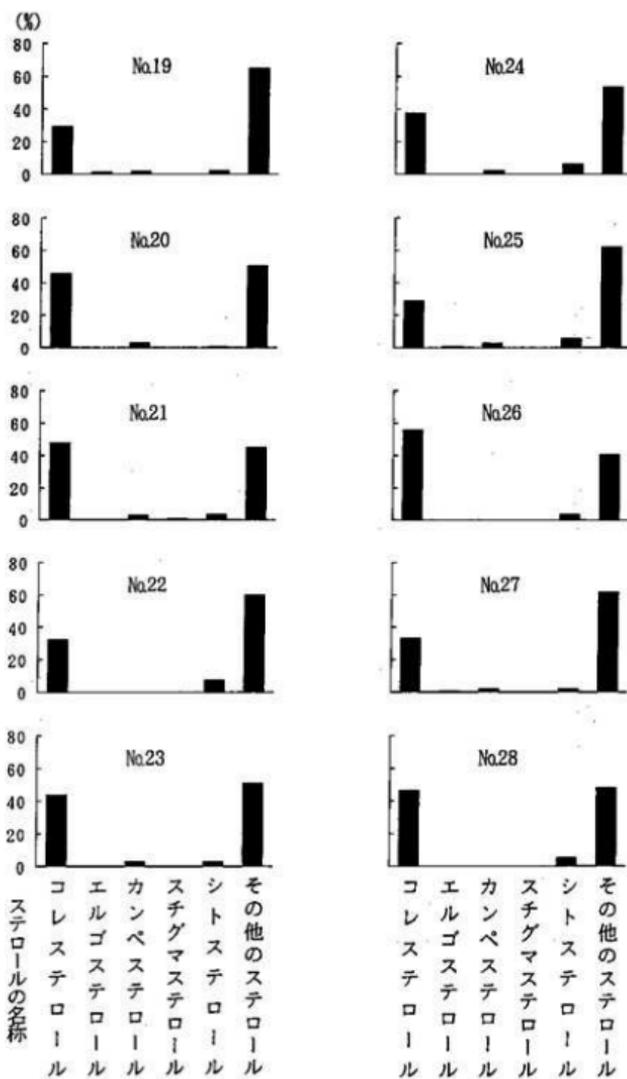


図3-3 S12集石内臓に残存する脂肪のステロール組成

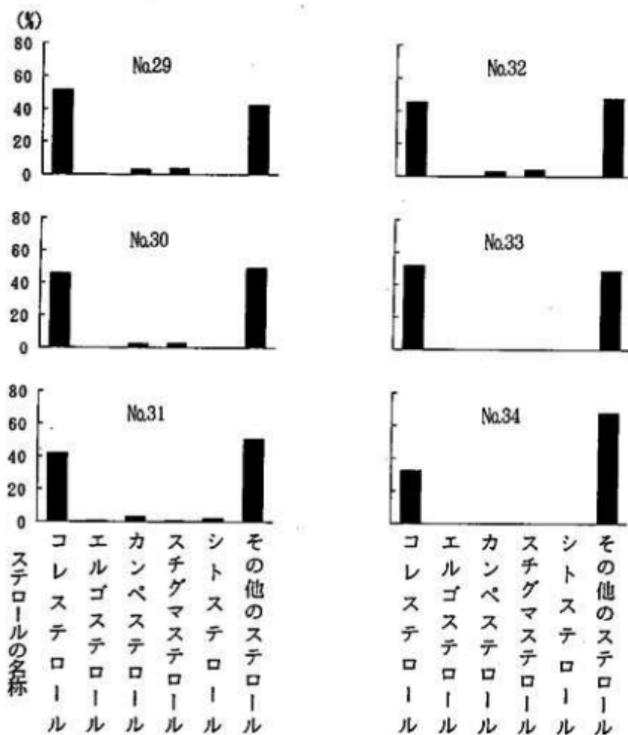


図3-4 SI 1 集石内臓に残存する脂肪のステロール組成

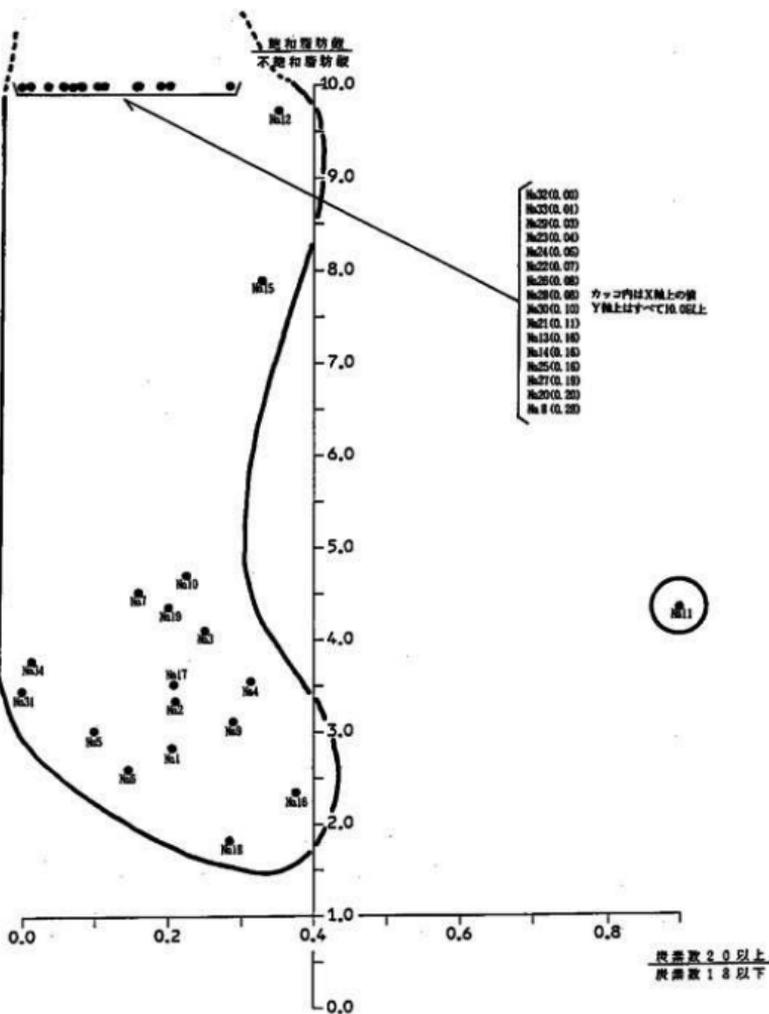


図5-1 加熱変性後の試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

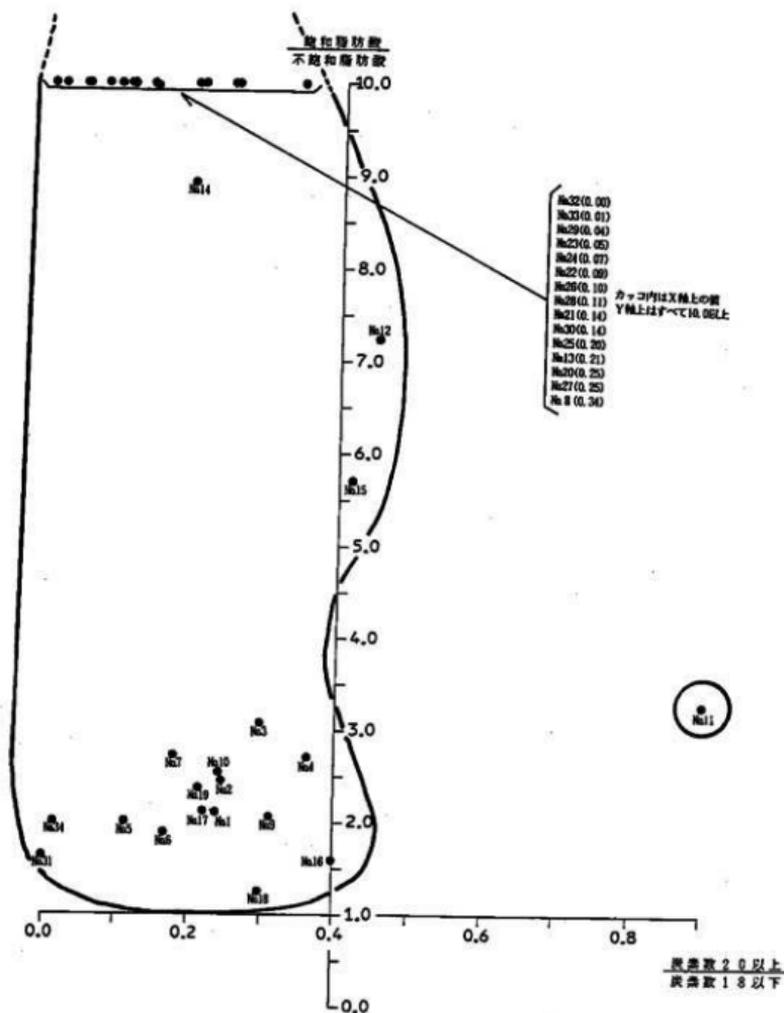


図5-2 加熱変性前の試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

第VI章 おわりに

天神河内第1遺跡では、これまで報告してきたように、御池ボラ(Ⅲ層)とアカホヤ(Ⅴ層)という2層の降下軽石・火山灰層によって区切られた3層の文化層が確認された。それぞれの層からは、Ⅵ層で集石遺構及び散礫群、Ⅳ層で集石遺構及び散礫群・配石遺構・土坑、Ⅱ層で壑穴住居跡・掘立柱建物跡・土壇・溝状遺構などが検出され、それらと同時期の遺物多数も出土した。また、このほかにⅤ区では石塔群も検出された。そこで、おわりにこれらの遺構・遺物に関するいくつかの問題点について述べてまとめにかえたい。

縄文時代の土器について

Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ層からは種々の縄文土器が出土したが、時期区分の目安としてそれぞれの土器が既存のどの土器型式に比定できるのか考えてみたい。まず、Ⅵ層の土器については、最近、アカホヤ火山灰層の下に埋設している縄文土器は早期以前のものであるとほぼ定着していると考えられる。具体的にはⅥ層の土器の分類の項で型式名に触れたが、おおよそ南九州の既存の土器型式に当てはまるもので、早期に限定され、しかもほぼ全般にわたるものが出土している。今回は最近精力的に該期の土器を体系化されている新東兎一氏の型式名を用いた⁽¹⁾。この分類のなかでいくつか型式名に触れなかったものがある。Ⅶa～d類土器については、a類は塞ノ神式か鍋谷式、b～d類は柘ノ原式に、Ⅶb類土器の73～78は全面押型文施文ではないが、器形などからヤトコロ式の時期くらいに相当するものではなからうかと思う。このほかの土器に関しては、少量出土でもあり今回は特に触れなかった。また、Ⅱ・Ⅲ～Ⅳ区のⅥ層から旧石器時代の遺物らしいものとして、石器計測表に載せた細石核と思われるもの10点と細石刃と思われるもの1点が出土している。これらは時間的に図化できなかったが、ほかには全く旧石器らしいものは出していないうえにその層位も検討していないので、今回はその存在を報告するだけにとどめ、詳細は次の機会を期したい。

次にⅣ層の土器について火山灰から見た場合、これらがアカホヤ火山灰層の上にあることから縄文時代前期以降であることはほぼ確実であるが、御池ボラの噴出年代が確定していないため下限は不明である。しかし、各類の土器を既存土器型式に比定してみると次のようになると考えられる。A類土器は、この類に特徴的なミズ腫れ状突帯から、AⅠ類が胴部が屈曲するタイプの、AⅡ類は通常の轟B式土器と思われる。前期前半の土器型式とされている。E類土器は沈線文を主文様とし、それに刺突文などを添えるもので、その特徴から曾畑式土器と考えられる。前期後半の土器型式である。Ea・Eb類などは曾畑式土器のなかでも古い方の土器かと思われる。F類土器のうち307は縦あるいは斜めの条線文の上に4条の沈線文を施すもの

で田中良之氏のいう「轟C・D式土器」である。⁽²⁾前期末に位置付けられている。この類の他の土器も施文具の違いはあれ良く似た文様が見られることから同時期の土器と思われる。さて、このほかのB・C・D類土器についてであるが、Bc類・C類・Da・Db類土器の連続刺突文は互いに類似した文様であり、時間的な近さを感じさせるものであるが、突帯や沈線文の有無、突帯の形状の違いは逆に時間差を思わせるものである。また、Ba・Bd類土器とBc類土器とはその突帯の形状の類似性から時間的に近いものとも思えるが、これらがどのような関係にあるのか今の所浅学ゆえに不明である。しばらく類例の増加を持ちたい。これらのうち、B・C類土器は鹿児島県地方で「深浦式土器」と総称されている土器に類似するものと思われ、⁽³⁾D類土器は水ノ江和同氏のいう「尾田式土器」に類似した文様の土器と思われる。これらはまだ、編年的に確立されていない。

IV層からは上記の前期に位置付けられている土器のほかに中期の土器も出土している。Ga・Gb類土器は、地文や施文部位または器形などから瀬戸内地方の中期土器の影響が見られる土器と考えられる。311～314などは胎土が他の土器とは異なり移入土器の可能性があるが、瀬戸内地方からの移入か九州の他の地方からの移入なのかはわからない。このうち、311～315は船元Ⅰ式土器に、317は波状の突帯が貼付されていることから船元Ⅱ式土器に相当するものと思われる。また、318～328は器形や摺糸文などから里木Ⅱ式土器に相当する時期の土器であろう。次にH類土器は、県内で多量に出土したのは今回が初めてであり、その位置付けについては諸氏⁽⁴⁾に多々御教示戴いた。これらの土器は鹿児島県では「春日式土器」として一括されているものに相当すると思われる。春日式土器は瀬戸内地方の中期船元式・里木式土器の影響を受けているとの指摘もあり、今回はそれを意識して分類を試みた。勿論、H類土器には縄文も摺糸文も見られないし、口縁部内面にも施文されない。しかし、そういう施文具や施文部位の違いは別にしてHⅠ類土器アの刻みのある∞状や波状の突帯は、船元Ⅱ式土器A類の爪形文や刻みのある∞状や連弧文状の突帯と共通の要素とも見られるし、イはアの波状突帯が変化したものと考えられる。また、HⅡ類土器の波状の平行沈線文、太めの沈線文などは船元Ⅲ式土器の平行竹管文や沈線文に類似のものと見られるし、HⅢ類土器の突帯による平行文や波状文、連弧文または渦文なども里木Ⅱ式土器に見られるという平行線文・細かに波打つ波状文などを低い貼付突帯で表現したものや渦文の存在と共通した要素と思われる。かなりこじつけがましいかも知れないが、H類土器はこういう細分と時期比定も考慮できるのではないだろうか。Ⅰ類土器は口縁部を肥厚させてその外面、上面、内面に文様を施している土器である。これらは、県内でも最近後期前葉の遺跡から発見されている口縁部外面施文・上面施文・内面施文のいわゆる「松山式土器」と総称されている土器に類似の施文帯を持つ土器で、後期の可能性のあるものである。以上によりIV層は、縄文時代前期前半～末、中期前半・後半、後期前葉も含む広範な時期のものを包含していると考えられる。また、このことによって御池ボラは後期の初め頃に

噴出した可能性が考えられる。Ⅱ層出土の土器については、Ⅱ層下部付近で出土した土器はⅣ層出土の土器に類似するものが多く、Ⅲ層のボラが風化に弱く移動しやすいことからⅣ層のものが上がってきたかⅣ区東端の斜面の方から流れて来たりしたものが殆どであろうと思われる。しかし、465や468～470のように表土直下付近出土の土器はⅣ層には類例が見られず、御池ボラ降下後の縄文時代後期前半及び晩期前半の土器と思われる。

土器片鏝・切目石鏝について

土器片鏝・切目石鏝は平畑遺跡⁽⁷⁾（宮崎市）や丸野遺跡⁽⁸⁾（田野町）など後期の遺跡からの出土例はあったが、今回Ⅳ区Ⅳ層の前期～中期を主体とする層から出土したことは注目される。土器片鏝は、その文様から前期に位置付けられると思われるもので、切目石鏝はⅣ層に少量ながら後期と思われる土器も見られたものの、出土した周辺には石鏝に伴うような後期の遺物は殆どなかったことから、前期または中期のものである可能性が高い。

集石遺構・配石遺構について

Ⅵ層から検出された集石遺構は、縄文時代早期の一般的な集石遺構とさして変わるものではなかったが、今回はSⅠⅠについては熱ルミネッセンス法による年代測定と残存脂肪分析を行った。その結果は第Ⅴ章に詳しいが、年代測定の方は約8,200年B. P. の値が示されている。この集石遺構の周囲からはⅠ類土器Ⅰが出土している。また、集石遺構の機能については、従来、南洋の島々に現存している石蒸料理跡などを想定したり炉跡を想定したりと種々言われている。残存脂肪分析の結果では、集石遺構内の礫からは熱変性を受けた動物性脂肪の痕跡が見られたこと、残存脂肪酸から推定された動物種の組み合わせの分布割合が高かったのはアカハラなどの野鳥で、次いでイノシシなどの動物が多かったことなどが報告されている。県内で確認される集石遺構のうち殆どは、礫が火を受けたように赤く変色したり割れたりしているものが多く、しかも周辺に炭化物や地面が火を受けた痕跡、灰、焼土などは検出されていない。この礫に動物の脂肪が付着しそれが熱変性を受けているということであれば、集石遺構の機能としては、礫の上で直接火を燃やして肉を焼いたか、あるいは加熱した石を肉に直接または間接的にのせて焼いたか、水を張った土器に肉と焼けた石を入れて煮たかなどが考えられるが、礫間に炭化物はあまり見られず植物由来の残存脂肪もあまり多くなく礫に黒い付着物があつたということは、植物でくるますに行う石蒸料理の方法でもあつたのであろうか。数種の動物性脂肪が認められることから礫は何度も使用した可能性が高い。Ⅳ層の集石遺構については分析は行っていない。早期の集石遺構と比較するとこじんまりとしたものが多い。Ⅳ層下部で検出されたことから、どちらかというと同期の集石遺構である可能性が高い。このⅣ層では配石遺構も検出されたが、これはⅣ層中からその上のⅣ'層にかけて検出され、配石遺構下部や周辺からⅠ類土器が出土していることから中期の遺構と思われる。石は中央や周囲の石の下部が薄く赤変し、近くに焼土や炭化物を含んだⅣ'層、地面が火を受けたような箇所なども見られることから短

期的な炉跡と考えることも可能であろう。

(管付)

弥生時代から古墳時代初頭の遺構・遺物について

弥生時代の遺構・遺物としては、堅穴住居1軒と、中期から後期後半にかけての土器や石器などを検出した。ここでは最も多く出土した口縁部に貼付突帯を有する壺A類(亀ノ甲式の系譜をひく壺)を中心に、その変遷と時期について考えてみたい。

A I類は小さな三角突帯に刻み目が施され、接合面の仕上も粗い。A II類は断面三角形の突帯が長くなる、あるいは下方に垂れるなど新しい様相がみられる。A III類では口縁部突帯が台形となり、その中でも突帯上面が平坦になるものと下方に垂れるものと新旧二つのタイプが存在する。A IV類では台形が幅広くしっかりしたものになる。このように、壺A類では、口縁部貼付突帯において三角突帯から台形突帯への変化がスムーズに流れ、I類→II類→III類→III b類→IV類の順に変遷していくようである。また、胴部上半の沈線はIII b類まで突帯をもつものと共存している。そのほか下城式壺も出土しているが極く少量である。壺は口頸部が朝顔形に大きく開くものや球胴を呈する無頸壺など城ノ越系のほかに、小片であるが胴部に重弧文を施された下城式の壺もみられる。そのほかA II類と同様の口縁部突帯をもつ鉢もある。また、胴部に波状文を施した破片も出土しているが、これは保木下遺跡⁽⁹⁾や前原北遺跡⁽¹⁰⁾でも類例がみられ、瀬戸内系の影響と推定される。

これら当遺跡出土の弥生土器は、亀ノ甲タイプの壺を中心に城ノ越系・下城式の壺など大きくは中期前半に位置づけできる。その中でA I類は、持田中尾遺跡⁽¹¹⁾にも類例が知られ、後で述べるようにA IV類を中期中葉に置いた場合、前期末まで上る可能性が高い。A II・III a類の変遷は⁽¹²⁾豊後遺跡でもみられ、中期初頭から前半におさまる。また、A IV類の時期については、中期末から後期初頭に比定される新田原遺跡⁽¹³⁾において下城式系やくの字状口縁の壺が主体を占め、A IV類との間に大きな開きがみられることから中期後半をその変化期として考えた場合、A IV類は中期中葉(～後葉)に位置づけされる。

弥生中期における宮崎平野部を中心とした地域では、前半以降、前原北遺跡⁽¹⁴⁾でみられるように亀ノ甲タイプの壺が主体を占め独自に発達しているが、その分布範囲や消滅の時期など後期とのつながりにおいても重要な問題である。一方下城式壺は中期中葉以後少なくなるが、その系譜は後期初頭まで残り、東九州との根強い繋がりを示している。

弥生前期末から中期にかけて、当遺跡と同様内陸部に分布する遺跡としては、今村遺跡⁽¹⁵⁾と下水流遺跡⁽¹⁶⁾があり、これらの遺跡は何れも川に面した段丘上に営まれている。このように弥生文化は、川を経路とし地形的制約を受けながらも、かなりのスピードで各地の内陸部まで浸透していったことが窺えるが、住居や磨製石器類がほとんど検出されていないことから、実際、生業活動に水田耕作がどれだけの比重を占めていたか疑問であり、今後の沖積地の調査を持ちたい。

古墳時代初頭の遺物としては、在地壘片のほか畿内布留系甕がほぼ1個体分出土している。内面は頸部までヘラケズリされ、口縁は内湾し、端部は外方につまみだされている。搬入品と考えられるが、比較的厚手で砂粒などを多く含んでいることから、県内の何れかで製作された可能性が高い。県内で内面にヘラケズリを施した甕は、熊野原遺跡C地区、宮の前第2遺跡⁽¹⁸⁾など知られるが、発見例や出土量が少なく、時期や伴件遺物など在地土器との関係についてこれから考えていかなければならない問題である。

歴史時代の遺構・遺物について

歴史時代の遺構には、掘立柱建物跡50棟、土壇128基、溝状遺構27条のほか石塔群が検出され、古代から近世までの幅広い時期の遺物が出土している。しかし、遺構・遺物のほとんどは、13世紀から16世紀代に収まるものと考えられるため、この時期の遺構・遺物について検討してみたい。

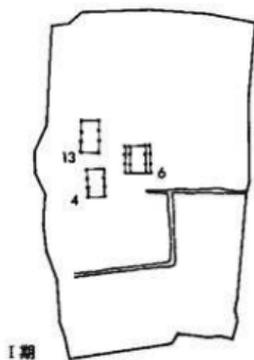
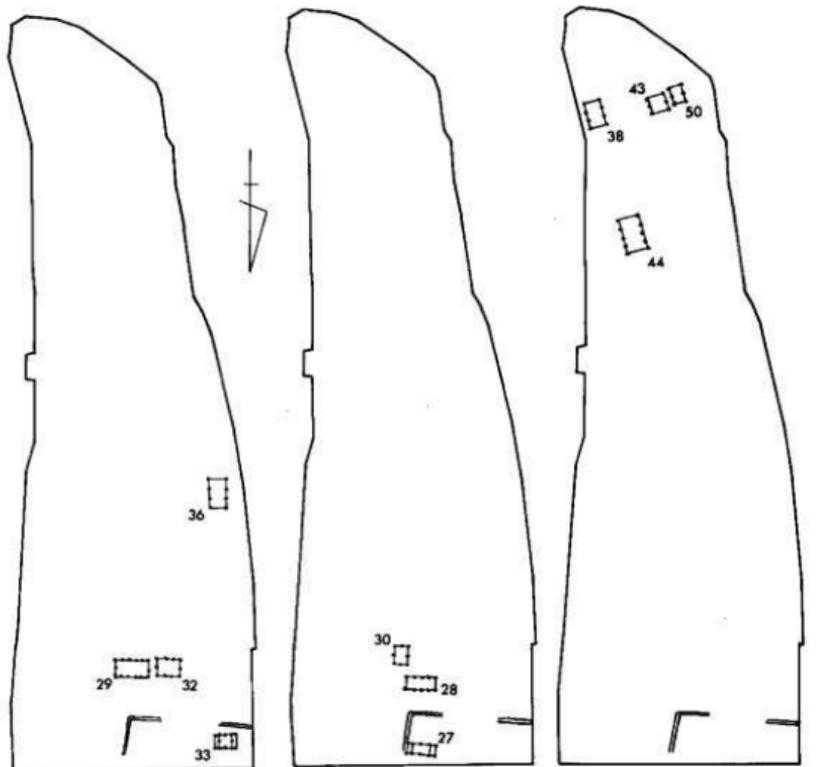
掘立柱建物跡は、I～III区で検出されその多くは複数の建物と重複している。SB13・14・18はそれぞれ5棟の建物と重複し、そのほかに4棟と重複するものが5箇所、3棟が6箇所、2棟が16箇所あり、少なくとも5時期の建物が存在すると考えられる。建物の時期は、柱穴から良好な状態で遺物が出土していないことや、切り合い関係も明確で確認できないことから、建物の主軸や梁の長さ、位置関係および遺構内から出土した土器片類を参考におおよそVI期に分けた。なお、出土遺物からみた時期幅は約300年あり、同時期として分類した建物もさらに細分可能であるし、前述したようにI区とIII区の間は削平されているため、当時の集落の状況を完全に復元したものでないことを付加しておきたい。

I期はSB4・6・13・29・32・33・36の7棟とL字状に区画するSE1とSE3、SE1に接し東西に走るSE2から構成される。建物は1間×3間を基本とし、SB4・6・13、SB33、SB29・32、SB36と分れて分布する。SB4・6・13は主軸がほぼ南北に示し、SB6は東西に廂をもつやや大型のもので、この3棟の建物はSE2によって区画されていた可能性がある。SB33は2間×2間の建物で東西に廂を有し、SE3区画内に位置する。SB27も当期に所属するかもしれない。SB29・32とSB36はやや離れて位置し、主軸は直交する。SB29は1×5間と大型の建物である。

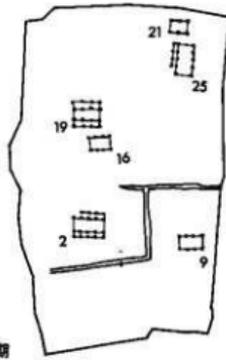
II期は、SB2・9・16・19・21・25・27・28・30の9棟で構成される。I期に比較すると建物が散逸し溝の外側にもつくられるようになる。

III期は、SB1・5・8・11・12・38・43・44・50の9棟から構成される。II区において1間×5間や廂をもつものなど大型の建物が出現し、溝の外側やIII区にも建物がつくられ、この時期には溝の機能が薄らぎ、すでに廃絶されていた可能性もある。また、III区にはI・II区でみられなかった1間×2間の小型の建物が現れる。

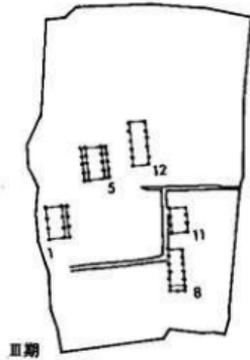
IV期はIII期でみられた大型の建物は少なくなり、1間×3間が主体をなす。SB3・7・10・



I期

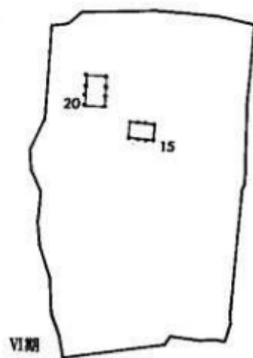
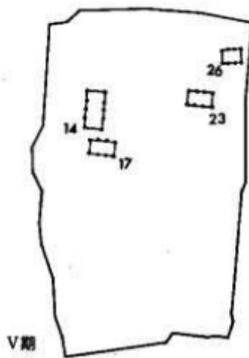
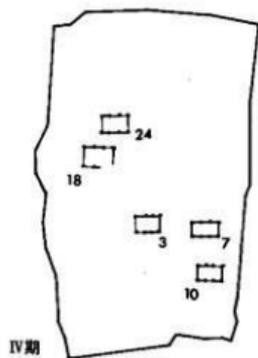
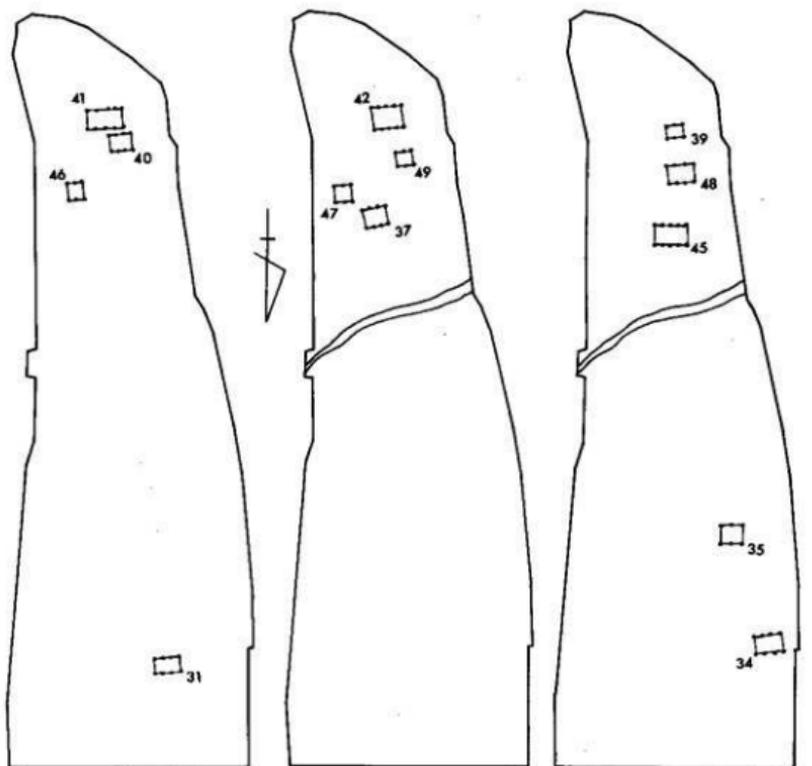


II期



III期

第150図 建物の変遷(1)



第151図 建物の変遷(2)

18・24・31・40・41・46の9棟からなる。

V期は大型の建物は消え、1～2棟を一単位としたSB14・17、SB23・26、SB37・47、SB42・49の四つのグループに分れる。また、Ⅲ区の北にはSE5が掘られ、北側と分断している。

VI期になるとSB15・20・34・35・39・45・48の7棟から構成される。I・II区の建物は1棟ずつと散漫な分布状況となるのに対し、Ⅲ区ではⅢ期で出現して以来、小型の建物を含んだ一時期1～3棟という状況が連続と続いている。

このように概略、建物の変遷をみてみたが、集落は13世紀前半に突然出現する。この状況は、宮崎学園都市遺跡群や松原第I遺跡⁽²¹⁾でも同様で、中世集落と古代の集落の殆どは占地を異にし、12世紀後半頃に大きな画期があったことを示している。一般的な集落構成は1～3棟を一単位とすると考えられるが、Ⅱ区においてはⅡ期からⅢ期にかけて建物の規模や集落構成の単位などに大きな変化が認められる。Ⅲ区でも大型の建物が出現するⅢ期に1～2家族による最小単位での集落がつくられるようになり、この時期(Ⅱ期～Ⅲ期)に何らかの変革が起きたと考えられる。また、この時期のⅡ区とⅢ区では建物の規模や出土遺物に格差がみられ、居住者に階層差が想定される。V期以後は、建物の規模は均一化され、集落も分散しいわゆる「散村」化⁽²²⁾していく。

IV・V区に検出された溝については、関連した建物などの遺構が発掘区内では検出されず、丘陵上に何等かの遺構がありそれに付随したものであるかもしれない。そして、その役割や用途については、溝が蛇行していることや底面が階段状を呈し、丘陵を「堅堀」状に掘ることから、単に区画だけでなく排水や防御、通路など想像されるが確証はない。溝の年代については、文明の軽石の堆積や切り合い関係からSE6・8・9・10・11・12・14・17・18は15世紀後半(文明の軽石堆積以前)には廃絶されており、I～Ⅲ区から検出された建物群とほぼ同時期に併存していたと考えられる。また、SE7は、SE9に堆積した文明の軽石層を切ってつくられていることから16世紀以降と考えられる。そのなかでSE18からはほぼ完形の須恵器環・蓋が、SE12・14では須恵器壘片が出土し、古代まで上る可能性もある。また、SE19は、石塔群の下に潜り、文明の軽石や新燃岳スコリアが混入していないことから最も古い溝と考えられる。

土壇の多くは掘立柱建物と混在せずにとまって分布していることから、墓壇として使用されていた可能性が高い。形態的にはIV類として分類した底面端部にピットを有するものなどあり、類例を待って検討したい。

出土遺物の殆どは包含層あるいは遺構内から破片で出土し、中世とされるものが大部分を占める。そこで国内外の陶磁器についてみると、13世紀代には東播系のこね鉢や壘、常滑焼大甕、青磁劃花文碗、青磁鎚蓮弁文碗、白磁碗がある。14～15世紀代にかけては東播系こね鉢、備前焼大甕や搦鉢、青磁端反り碗、15世紀後半から16世紀代には青磁線描蓮弁文碗、青磁綾花

皿、白磁端反り碗、白磁小皿、染付碗・皿などがある。分布状況をみるとⅠ・Ⅱ区で13世紀から16世紀代のものが、Ⅲ区では15～16世紀のものが大部分を占め、これはⅠ・Ⅱ区からⅢ区へ集落が広がったことと合致する。また、今回は破片が多かったことから土師質の坏や小皿にはっきりした年代を与えることはできなかったが、底部と胴部との境が明瞭で体部に成形時の凹凸を残すへう切り底の坏は、山内石塔群や車坂城、堂地東遺跡などから出土し、14世紀の年代が与えられている。このように、国内についてみると東播磨、常滑焼、備前焼と比較的スムーズな流れが追え、13世紀代から広域の土器流通圏や経路が存在しているようで、それが県内にとどのような割合で広がっているのか土師質土器の状況もあわせて今後検討していきたい。

ここでこの地域の歴史的背景をみると、鎌倉初期の1197年、建久の日向因田戦には、田野町や山之口町を含む三俣院700町を支配していた地頭の島津忠久の名が見える。また、13世紀前半には肝付氏が山之口に入るが、14世紀前半に足利氏によって派遣された畠山義顕によって日向から一掃される。そして、14世紀末には島津氏が宮崎平野部まで進出し、15世紀中頃までこの地の支配が続く。15世紀末頃には伊東氏によって16世紀前半まで支配され、それ以後は再び島津氏の所領となる。このように遺跡周辺は、宮崎平野部の伊東氏と都城に位置する島津氏お互の勢力拡大のための足掛として、どうしても必要な地域（前線基地）であったと考えられる。また、田野～山之口間の街道についてみると、近世には田野町麓～^{片井野}山之口町無頭子^{ひとうし}上長野～麓を結ぶものと、田野町八重～山之口町飛松^{とびまつ}～麓を結ぶ二つの間道があり、青井岳^{あおいだけ}や無頭子に番所跡が知られ遺跡周辺が交通の要所であったことが窺える。また、天正8～15年（1580～87）まで宮崎地頭として宮崎城に配置された島津義久の家老、上井寛兼が鹿児島県へ向う場合でも大部分は田野経由を使用しており、当時からすでに街道として整備されていたと考えられる。

今回検出された建物群は、街道からはずれて位置するため、街道とともに発達した集落とは考えにくく、L字に区画する溝、銅鏡などが出土していることや検出された建物の格差が認められることから、勢力を有した領主層や農民層など各階層の人々が共存した集落と考えられる。同時期の集落としては、宮崎学園都市遺跡群の前原北遺跡⁽²¹⁾や熊野原遺跡C地区⁽²⁸⁾がある。宮崎学園都市遺跡群の位置する熊野でも伊東と島津の勢力争いが繰り広げられ、当遺跡と同様な社会環境のもと、溝に区画された建物群があり、建物に格差が認められるなど類似した集落の状況を示している。このように13～15世紀にかけては、在地領主など勢力を有した階層と農民層などの人々と共同の生活経営が行われていたと考えられる。それは、領主とその隷属民という関係とともに当時の政治的（軍事的）不安定による戦力の保持、緊急時に於ける臨戦体制など「防衛」的役割を有するものであった⁽²⁹⁾のではなかろうか。そして、16世紀後半になると島津氏の支配下に置かれるため建物も少なくなりその役目を終るようである。（谷口）

- 註(1) 「早期九州貝殻文系土器様式」「塞ノ神・平袴式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
1989年
「塞ノ神式土器再考」『日本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論文集 六興出版
1988年
- (2) 氏の御教示による。このほか、轟C式土器と轟D式土器は別型式の土器とする註4の水ノ江氏の
見解もある。
- (3) 柴畑光博・東和幸両氏の御教示による。
- (4) 「中・南九州の曾畑式土器」『肥後考古』第7号 肥後考古学会 1990年
- (5) 田中良之氏は以前から鹿児島島の春日式土器は変容はしているが船元式土器と思われるという主旨
のことを言われ、今回もH類土器について瀬戸内地方の船元式土器との対比等御教示戴いたが、
筆者が十分に消化できなかったことをお詫びしたい。また、このほか中村耕治氏には春日式土器
について御教示戴いた。
- (6) 泉 拓良「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観』3 小学館 1988年
この中で泉氏は春日式土器を「東南九州に成立した並流様式ともいべき土器群」と述べている。
- (7) 「平畑遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985年
- (8) 「丸野第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第11集 田野町教育委員会 1990年
- (9) 「保木下遺跡」宮崎県教育委員会 1986年
- (10) 前原北遺跡では壺の胴部に多くみられる。
「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988年
- (11) 「持田中尾遺跡」高網町教育委員会 1982年
- (12) 「鐘遺跡」『新富町文化財調査報告書』第2集 新富町教育委員会 1983年
- (13) 「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集 新富町教育委員会 1983年
調査者は土器を古・中・新に分けているが集落はほぼ限られた時期（後期初頭）に比定している。
しかし、調査者も指摘しているが住居には若干の時期差があり、土器に新旧の要素がみられるこ
とや凹線文土器が瀬戸内地方では、中期末に比定されていることから時期幅をもたせた。
- (14) 石川悦雄氏編年のⅢ期にあたり、そのなかでも壺AⅣ類は後半に位置づけされる。
石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描（Mk.Ⅱ）」『宮崎考古』9
宮崎考古学会 1984年
- (15) 前原北遺跡では、壺や壺に多用され主体的な形態となっているが、後期にはその系譜の壺はま
たく出土していないことから、中期後半から末には断絶した可能性がある。それは外来系土器の出
現と何等かの関係があるのかもしれない。
石川悦雄「日向における外来系土器の伝播とその地域性（一）—瀬戸内・畿内系土器の流入とそ
の展開—」『研究紀要』9 宮崎総合博物館 1983年

- (16) 「今村遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(三)
宮崎県教育委員会 1979年
- (17) 「赤松・下水流遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第1集 東郷町教育委員会
1987年
- (18) 「熊野原遺跡C地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集
宮崎県教育委員会 1985年
- (19) 平成元年度宮崎県文化課によって発掘調査が行われている。
- (20) 「松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『都城市文化財調査報告書』第7集
都城市教育委員会 1989年
- (21) 当遺跡では、集落内における政治的あるいは軍事的結合が緩み、領主層と農民層との居住地の分化が行われたのではなからうか。
- (22) 「山内石塔群」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第1集 宮崎県教育委員会
1984年
- (23) 「車坂城西ノ城跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会
1988年
- (24) 「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会
1985年
- (25) 『宮崎県「歴史の道」調査報告書』 宮崎県教育委員会 1977年
ここでは、鹿兒島街道と記されている。日向地誌から引用されているものと思われる。
平部嶺南『日向地誌』 1855年
- (26) 富永嘉吉「上井覚兼日記の研究(二)」『研究紀要』10 宮崎県総合博物館 1984年
- (27) 註(10)と同じ
- (28) 註(18)と同じ
- (29) 広瀬和雄「中世村落的形成と展開」『物質文化』50 1988年

参考文献

- 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号 倉敷考古館 1971年
- 「平木場遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1) 宮崎県教育委員会 1973年
- 「灰塚遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(2) 宮崎県教育委員会 1974年
- 「柿川内第Ⅰ・第Ⅱ遺跡」『瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財報告書』
宮崎県教育委員会 1976年
- 『若宮田遺跡発掘調査報告書』 清武町教育委員会・南宮崎農業協同組合 1979年
- 「黒草遺跡」「小原遺跡」「丸谷第1遺跡」「丸谷第2遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』
(3) 宮崎県教育委員会 1980年

- 「辻遺跡」 清武町教育委員会 1980年
- 「塞ノ神式土器」「曾畑式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣 1982年
- 「下田畑遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集 宮崎県教育委員会 1985年
- 「芳ヶ迫第1遺跡、芳ヶ迫第2遺跡、札ノ元遺跡」『田野町文化財調査報告書』第3集 田野町教育委員会 1986年
- 「右京西遺跡」「萩台地の遺跡」X 萩町教育委員会 1986年
- 「前谷遺跡」『松山町埋蔵文化財調査報告書』(1) 松山町教育委員会 1986年
- 「猪之辻遺跡」『串間市文化財調査報告書』第1集 串間市教育委員会 1987年
- 「崩野遺跡」『南郷町文化財調査報告書』第2集 南郷町教育委員会 1990年
- 「笠下遺跡」ゴルフ場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』『北方町文化財報告書』第1集 北方町教育委員会 1990年
- 「鞍谷遺跡—特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」『枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書』(6) 枕崎市教育委員会 1990年
- 「前畑遺跡 一般国道 220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅲ)」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(52) 鹿児島県教育委員会 1990年
- 「大戸ノ口第2遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第5集 高鍋町教育委員会 1991年
- 「第四章 縄文時代」『宮崎県史 資料編』考古1 宮崎県 1989年
- 「田野町遺跡詳細分布調査報告書」『田野町文化財調査報告書』第10集 田野町教育委員会 1990年
- 「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第1集 都城市教育委員会 1981年
- 石川悦雄「日向考古資料Ⅰ」『研究紀要』No.10 宮崎県総合博物館 1985年
- 式末純一「須玖式土器」『弥生文化の研究』4 雄山閣 1987年
- 日高次吉『宮崎県の歴史』山川出版社 1970年
- 間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集』(3) 小学館 1977年
- 「薩摩街道」『宮崎県「歴史の道」調査報告書』 宮崎県教育委員会 1978年
- 「山之口町の文化財」山之口町教育委員会・山之口町文化財専門委員会 1986年
- 「宮崎県」『角川日本地名大辞典』45 角川書店 1986年
- 岡本武彦「日向における古代から中世にかけての—様相 —宮崎学園都市を中心として—」『宮崎考古学会例会資料』 宮崎考古学会 1990年



II区 南端土層断面
(上からII~VI層)



III区 VI層上面
(アカホヤ層直下)
遺物出土状況



V区 SE17 検出状況



天神河内第1遺跡遠景（南から）



同 近景（北から）



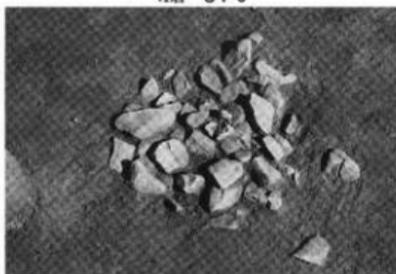
VI層 S12



VI層 S18



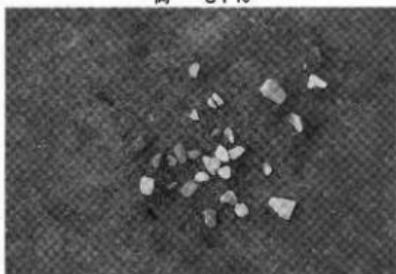
同 左からS15・4



同 S110



同 S16



同 S113



同 S17



同 S114



VI層 S115



VI層 S120



同 S116



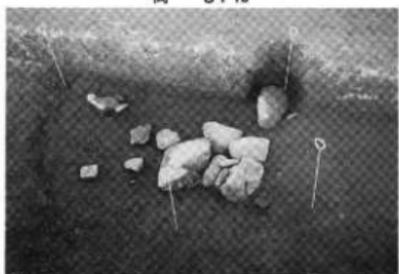
同 S121



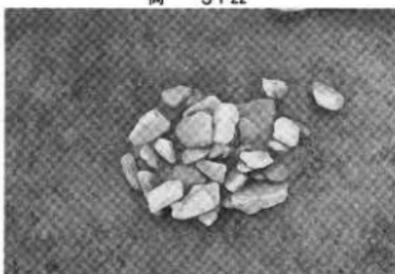
同 S118



同 S122



同 S119



同 S123



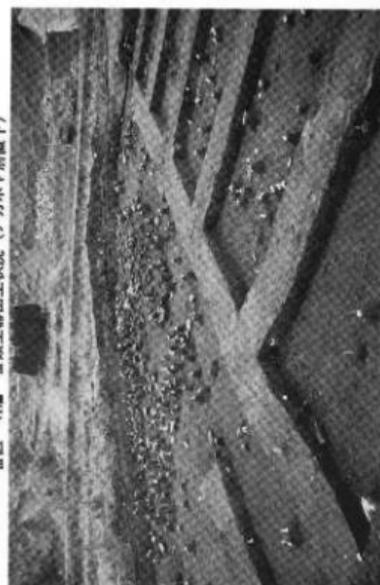
I区 VI層 Ⅷb 類土器出土状況



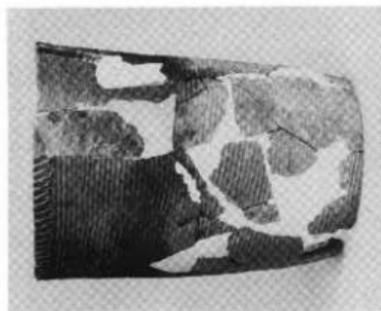
Ⅲ区 VI層 Ⅷ類土器出土状況 (アカホヤ原直下)



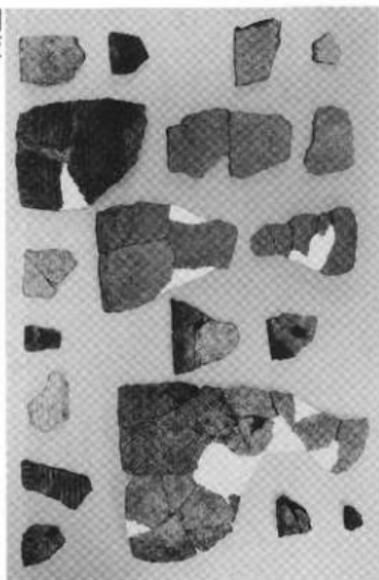
Ⅱ区 Xa 類土器出土状況



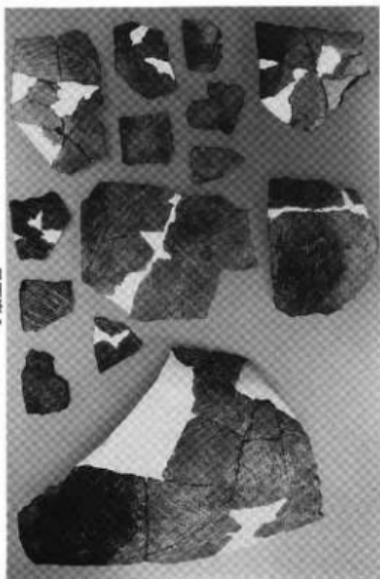
Ⅳ区 遺物出土状況



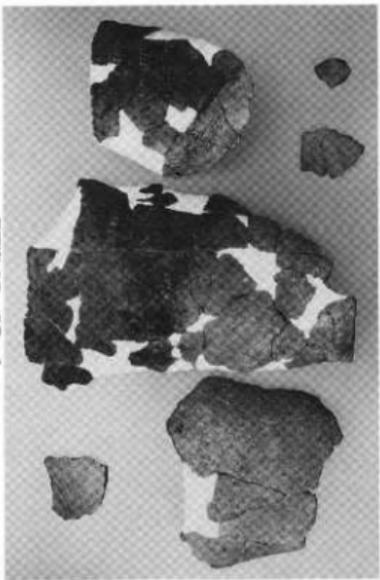
I 類土器



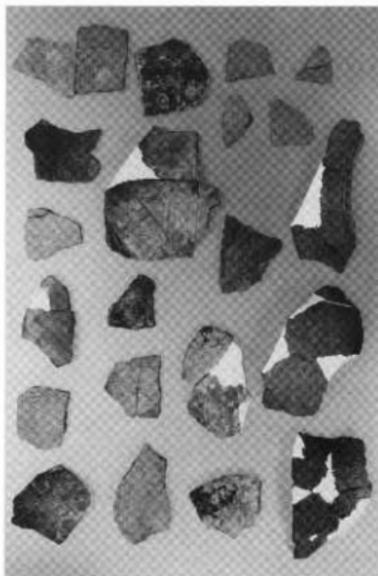
I・IIa・IIb 類土器



III・IV類土器、貝殻条痕文土器



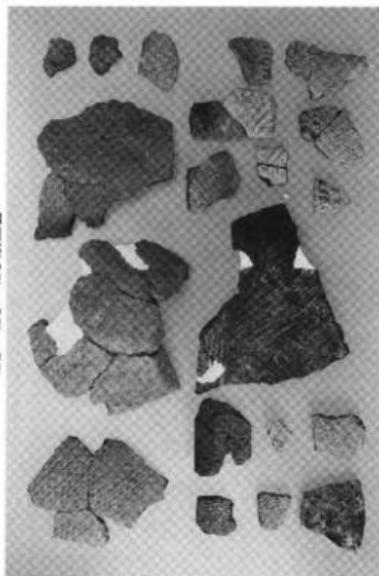
V・VI類土器



Ⅴa・Ⅴb・Ⅴc類土器



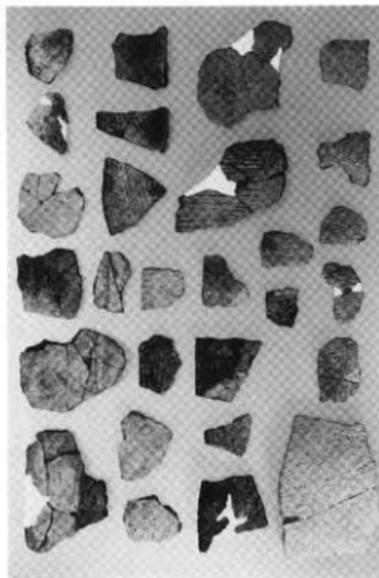
Ⅴe・Ⅴ類土器底部、Ⅴa・Ⅴb類土器



Ⅴb・Ⅴ類土器



Ⅴ・Ⅴa・Ⅴb類土器



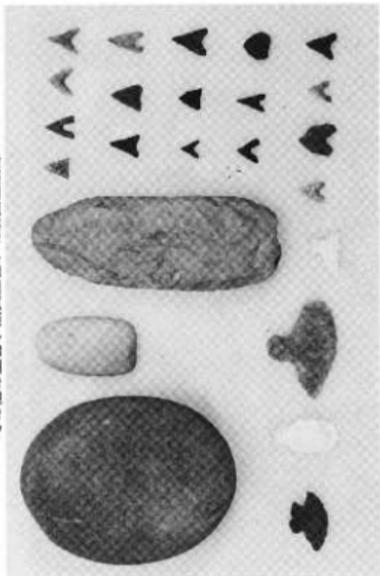
Xb₂・Xc 類土器、その他の土器



その他の土器、無文土器、VI層出土底部



VI層出土石器



VI層出土石器



IV層 S12



IV層 S16



同 S13



同 左からS17・8



同 S14



同 S19



同 S15



同 S110



IV層 1号配石



IV層 5号配石



同 2号配石



同 6号配石



同 3号配石



Ⅲ区 IV層 遺物出土状況



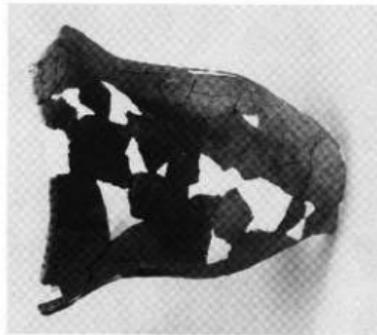
同 4号配石



Ⅳ区 IV層 遺物出土状況



3号配石・5号配石・SC3出土器(上から)



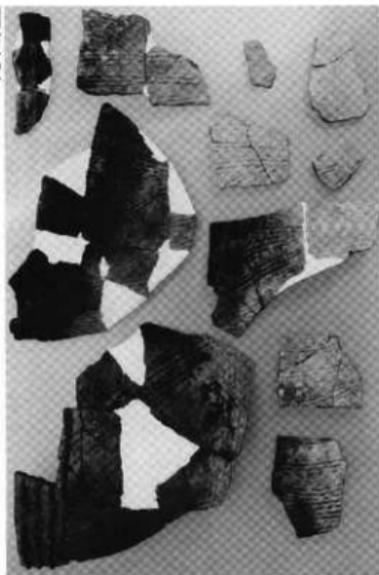
HI類土器363



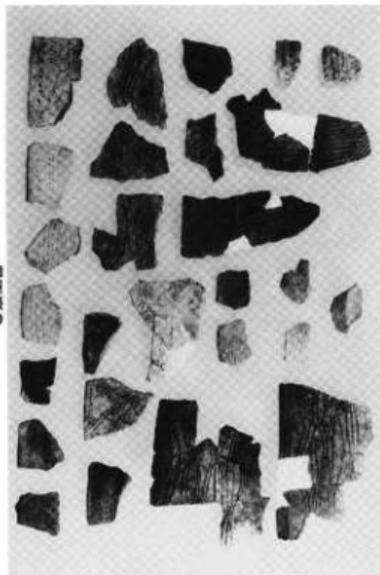
AI・AIIa・AIIb類土器



AIIb・AIIc・AIIId・AIIe類土器



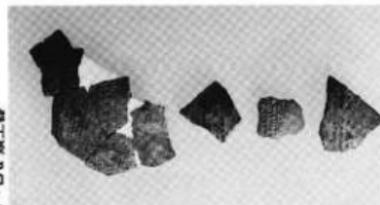
C類土器



Db・Dc・Es・Eb・Ee類土器



A類土器その他・底面、Ba・Bb・Bc・Bd類土器



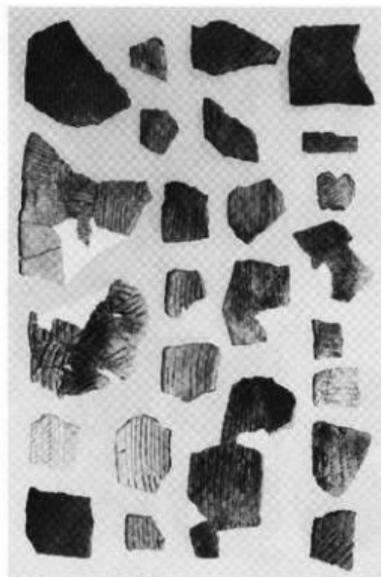
Da類土器



Da類土器



Db · Dc · Ea · Eb · Ec 陶土器内面



Ee · Ed · Ee 新土器



E 類土器底部



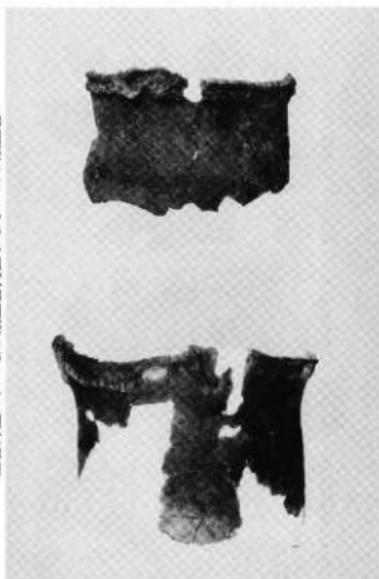
E 類土器底部、土器片蓮、F · Ga · Gb 類土器



土器片種・F・Gs 土器内面、Gb・HI 土器



Ga・HI 土器



HI 土器

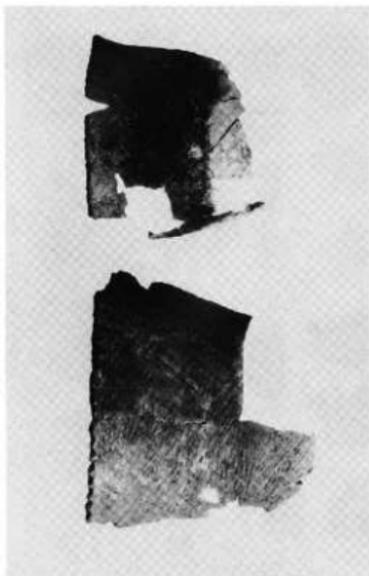


HI 土器

器土器Ⅲ・Ⅲ・Ⅲ・Ⅲ



器土器Ⅰ



器土器Ⅲ・Ⅲ・Ⅰ

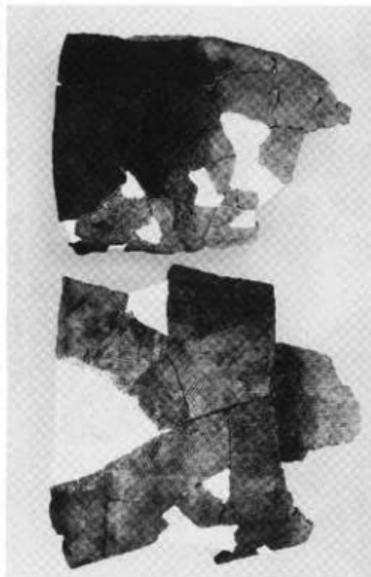


器土器Ⅰ

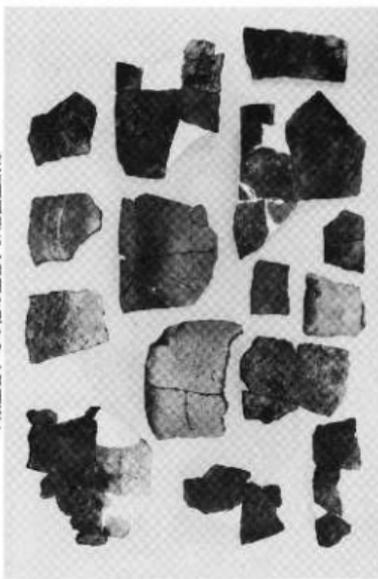




I 類土器、その他の土器、IV層出土陶器



IV層出土無文土器



IV層出土髹部、無文土器



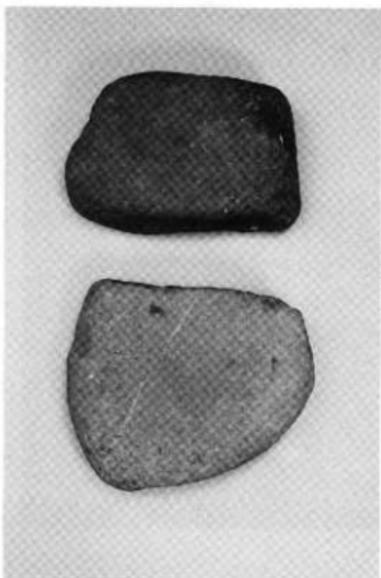
IV層出土無文土器、底部



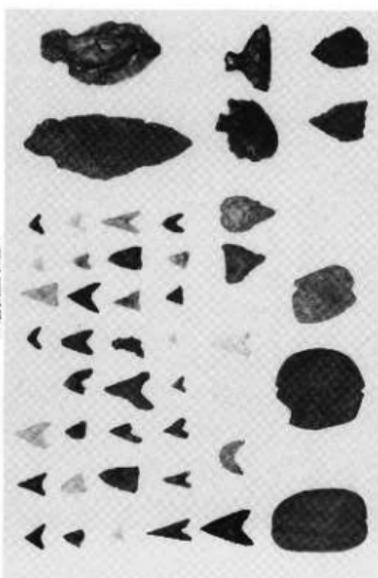
IV層出土石器



II層出土石器



IV層出土石器



IV層出土石器



道跡遺景



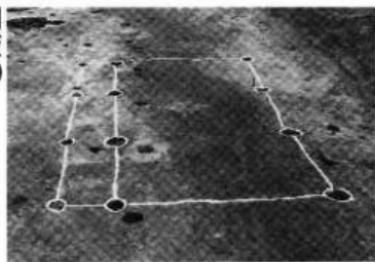
Ⅱ区遺景



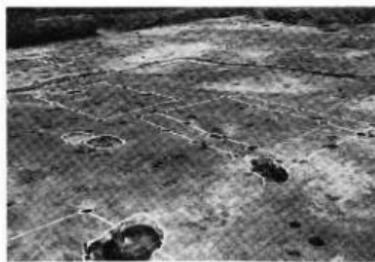
Ⅱ区 建物検出状況



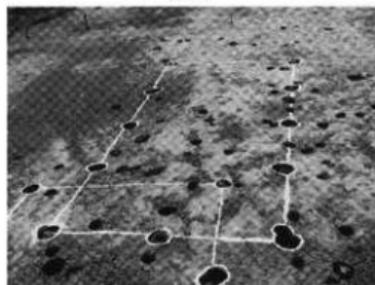
SB 6・12・15



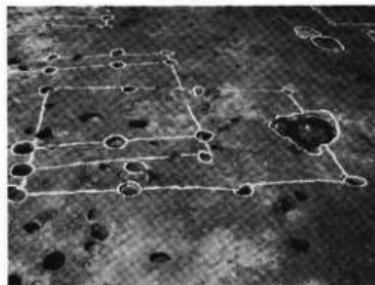
SB1



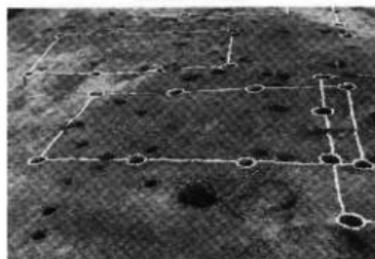
SB2・3



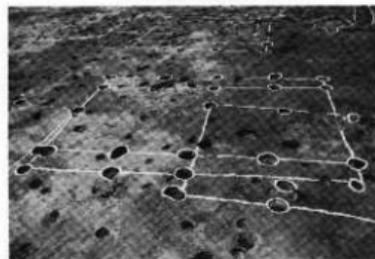
SB3・7~11



SB4・SC21



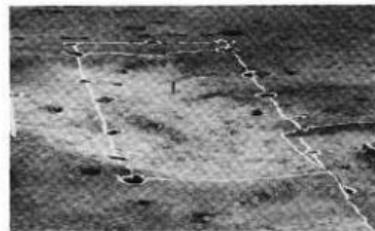
SB9・7



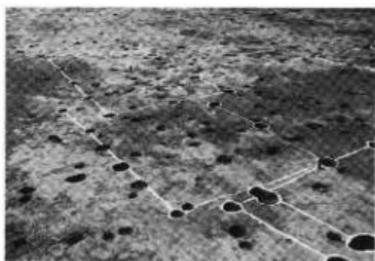
SB6



SB10



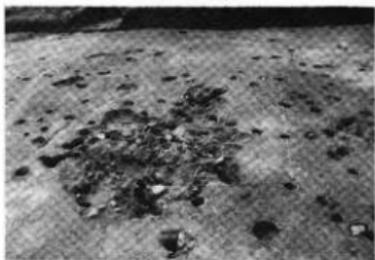
SB8



SB14・20



SB25



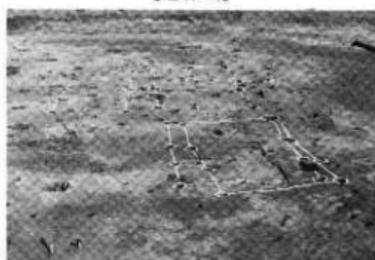
SB23・SA1



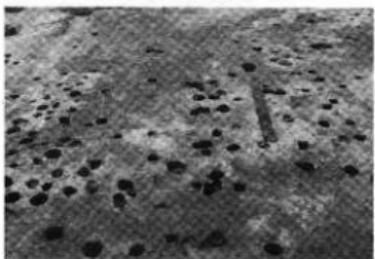
SB41~43



SB35・36



SB28~32



SB40・48・49



SB39・40・49



SE 1 土層断面



SE 2 土層断面



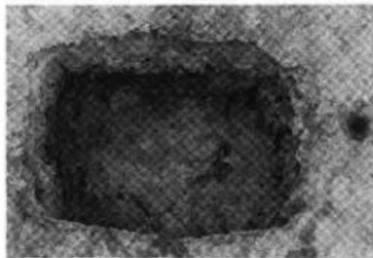
石組遺構検出状況



SE 1・2 検出状況



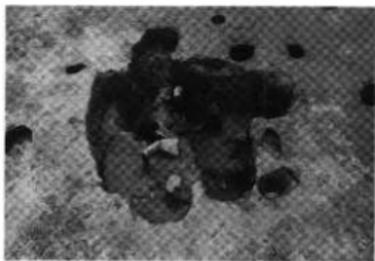
石組遺構 (南東より)



石組除去後



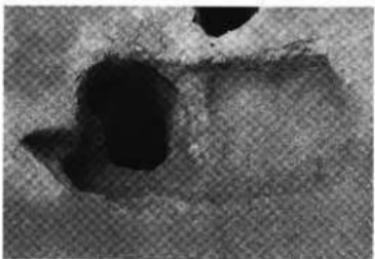
石組遺構 (北より)



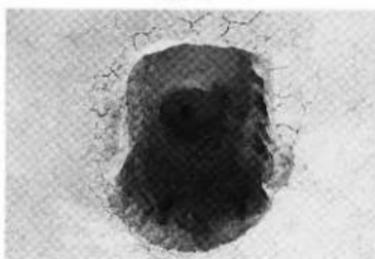
SC 1



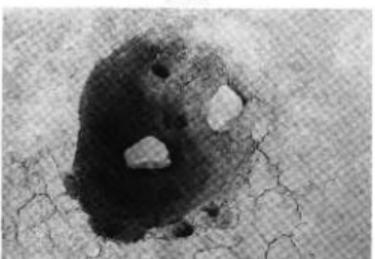
SC 26



SC 6



SC 31



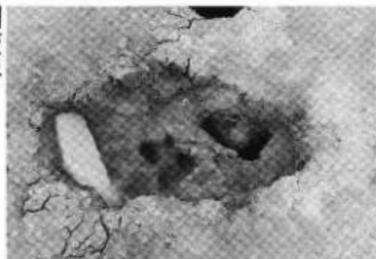
SC 30



SC 34



SC 28



SC37



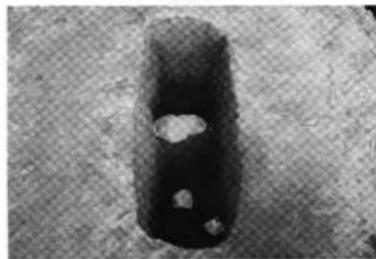
SC56



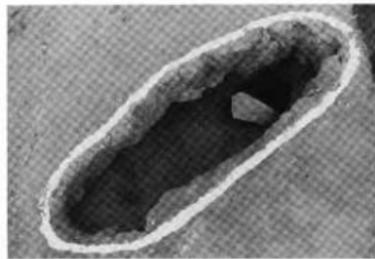
SC57



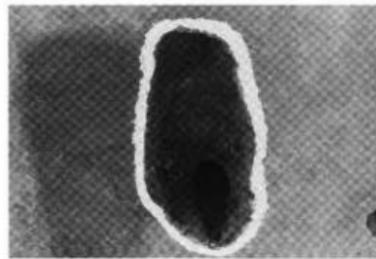
SC58



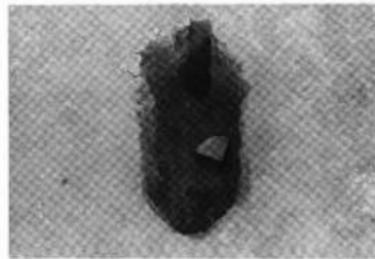
SC59



SC64



SC95



SC66



Ⅲ区 検出状況



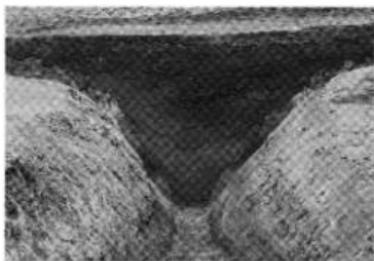
SE 5 検出状況



IV・V区 検出状況



SE 14 検出状況



SE 5 土层断面



IV区 檢出狀況



SE 9 土层断面



SE 12 土层断面



SE 14 土层断面



SE 17 檢出狀況



SE 17 土层断面



SE 20 土层断面